

<暖冬!>年明けからしばらくは 24 節季の“小寒”から“大寒”の名の通り 1 年を通じて最も寒いですが、例年になく富士山の雪が少ないですね。昨年末には裾野近くまで積もっていた雪が年初から数日続いた春の暖かさで融けたままです。右上写真はこの 14 日朝の富士です。右下は数年前の同日同時刻ころに撮ったもので例年ならこのように裾野まで雪に覆われた姿です。



<富士と雑木林>富士を眺め雪の積もり具合から「暖冬のせいでしょうか?」「そうですねえ...」といった会話ができるのは SHC だからこそです。晴天の日には自然と西に目が行き近景の雑木林とその向



この富士の姿から四季の変化を感じられるキャンパスです。ところで、建物の屋上など特別な場所を除くと、遮る物なく富士の見えるのはハイテク棟への回廊と体育館裏の雑木林沿いの道のみです。富嶽三十六景とはま

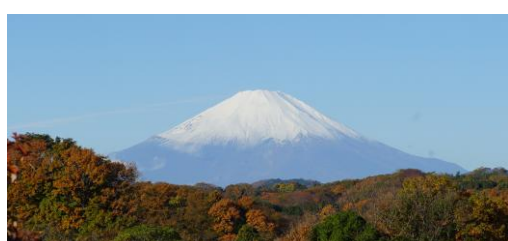
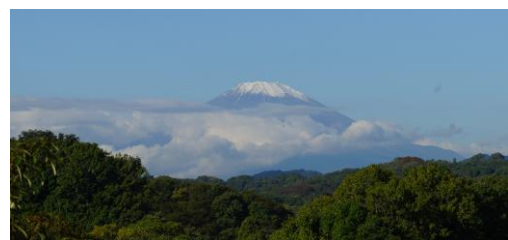
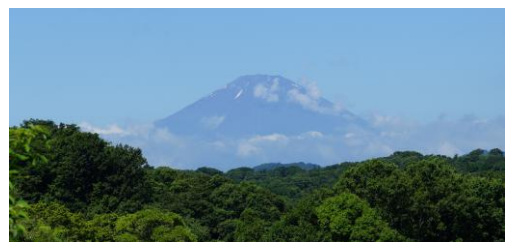
ませんが定点(回廊より：に位置する)から眺めた富士林の折々の変化はみごと写真はとりわけ雪の多か季節を追って朝に撮った



SHC は富士の約 50km 東土とその前景となる雑木です。左上からの 5 葉の 2014 年の初春からものです(上から順に、4

月初旬、6 月中旬、8 月初旬、11 月初旬、11 月下旬)。

<活火山>「信仰の対象と芸術の源泉」(世界文化遺産)である富士山は今静かにそびえています。奈良時代以降 10 回以上火を噴く山であったとのこと。「活火山富士」についてセンセーショナルな本が出されたりもしますが、宝永の大噴火(1707 年)のようなことが起こらないようお願いしたいものです。ところで、富士山-SHC を結ぶ線を東に延ばすと千葉県市原の方にあたります。平安時代には上総の国府があったところで、その地からは煙を噴き夜には頂上の赤く燃える富士が見えたそうです(更級日記：藤原孝標女による回想録、1020 年頃)。万葉集にある「田子の浦ゆうち出でてみれば真白にそ富士の高嶺に雪は降りける(山部赤人、巻 3.318)」は静かな山のようなのですが次の巻 3.319 には火を噴く山が記されています。



(文と写真：松本正勝)

